

趣味への逃避行

村田 勝 敬

■ プロローグ

今から 50 年前のオーディオ製品の主要パーツ（部品）は真空管が担っていた。その後、徐々に真空管がトランジスターに代わり、やがて集積回路（IC）そして大規模集積回路（LSI）が用いられるようになった。当時、どの家庭にも真空管式ラジオがあったが、安物の真空管式ラジオは裏蓋付近にある金属ネジに触れると時々感電することもあった。それが時流とともにテレビに置き換わった。発売当初のテレビ受像機の中には大きなブラウン管とともに、真空管が多数並んでいた。私の小中学生時代はまさにこれら製品の転換期であり、テレビの購入に伴い家庭のラジオが廃品扱いされ始めていた。



■ 趣味の高揚

小学 6 年の時、小遣いを貯めて、半田ゴテやラジオペンチなどを購入した。使われなくなったラジオを解体し、最初はひたすら観察。各々のラジオ部品と配線図の関係が少しずつ解ってくると、増幅器（いわゆるアンプ）部分の回路図を手書きで写し、火傷や感電を繰り返しながらもアンプらしきものを作り上げた。中学 2 年の時にはアマチュア無線免許を取得し、簡単な真空管式ワイヤレスマイクも製作できるようになった。高校に入学してから、家にあったトタン板を切り刻んでアマチュア無線用送受信機も作った。電気少年は趣味を生かしつつ生計が立てられるようにと、大学では電気工学科に進んだ。大学 3 年の時に、秋葉原駅ガード下の電気街で購入した新品の LUX 製トランスや真空管で出力 30W のステレオアンプを製作した。この頃になると日本メーカーの真空管

製造も廃れ、これが真空管との最期の親交と信じていた。

■ 個人と社会の狭間

わが国で真空管が隆盛を極めていた 1961 年に、米国の社会学者デービット・リースマンは「孤独な群衆」を著した。絶えず周囲に目配りして生きていく他人指向型、自らの不動の内的規範に基づいて仕事をしていく内部指向型（昨今話題になっている“アスペルガー症候群”はこのタイプか？）、時代にあった自分の目標を選び自己調節できる自律型、人々と接することによる葛藤から適応不全に陥ったアノミー型の 4 タイプの人間像を米国社会の中から描写していた。今日、テレビニュースを賑わすのはアノミー型の人間であろう。社会全体が所得倍増計画に向かって突き進んだ 50 年前の時代と異なり、現代はコミュニティ（共同体）を構成する個人が和することもなく自分勝手な眩きを吐く、まさに孤独な群衆で溢れる、社会である。このような病める社会に蔓延するのはある種のこころの病かもしれない。

■ 脳のエネルギー枯渇

2010 年 5 月に日本生物学的精神医学会、日本うつ病学会、日本心身医学会、日本精神神経学会の 4 学術団体は、うつ病などの精神疾患が癌や心臓病疾患と並ぶ三大疾患として先進諸国で最優先課題となっている点を重視し、“うつ病”を「国家的課題として啓発に取り組むべき」とする提言を発表した。これを受けてか、厚生労働省のメンタルヘルス・ポータルサイト「こころの耳」がこの年より開設された。この中で説明されているうつ病の定義は「脳のエネルギーが欠乏した状態」であり、その結果、憂うつ気分や意欲低下、身体的な自覚症状、人間本来持ち合わせている自然治癒力の喪失が起こるようになる。このため、仕事、家事、勉強など本来の社会的機能がうまく働かなくなり、また人との交際や趣味など日常生活全般に支障をきたす状態になる。うつ病にはメランコリー型、非定型、季節型、産後の 4 つの病型があり、

必ずしも症状が同じ訳ではない。ただ、「楽しみや喜びを感じなくなった」、「何か良いことが起きても気分が晴れない」、「趣味や好きなことが楽しめない」などが2週間以上継続し、しかも不眠状態が伴ってくるならば、急いで「お医者さんに相談だ！」

■ 現代病の克服

30年以上前に読んだ「失われし自我を求めて」を著したロロ・メイは、前述のリースマンの人間像を踏まえて、「多くの現代人が周囲に気遣い、周囲と迎合している間に自我を見失い、自我あるいは自己同一性を持つことができなくなっている」と警鐘を鳴らし、自我の確立の必要性を強調した。彼の言葉を現代風に言い換えると「多くの現代人が周囲の刺激に怯え、周囲との隔絶あるいは周囲との一体化を図っている間に自我形成を怠り、自らの目標すら見出せなくなっている」のかもしれない。今社会で求められているのは、多様化する中での最小限の社会的規範とともに、自律型人間像である。これは、より高度なLSIを内蔵する製品をいくら駆使しても、また他者にその方法を教わっても一朝一夕に形成できるものではない。や

はり他人は他人、自分は自分のままである。周囲に迎合するのではなく、現実を直視しながらも時間をかけて読書に勤しみ、自らの目標（自己同一性）を見定めるしかない。

■ エピローグ

昨年秋、過去の遺産である真空管が今なおロシアや中国で製造され続けている事実を知った。デジタル精密機器にあまりに慣れ親しんでいる今日にあって、真空管のほのかに暖かいアナログ音が急に懐かしくなってしまった。そう考えると、じつと我慢してられない性分である。37年ぶりに趣味の世界に逃避行し、半田ゴテを握ってしまった。試行錯誤の末に完成した真空管式15Wステレオアンプの音は、手持ちのLSI集合体であるメーカー製アンプと比べ、演奏者が奏でる個々の音を明瞭に左右の耳に伝え、感性が研ぎ澄まされる気がする。まさに「失われし自我」が戻って来た瞬間である。自我の確立は人生の目標を全うする上で必要不可欠な道程であるが、その途上に出くわす多くの困難を癒すための“趣味への逃避”も予防医学になくはならない必需品のように感じる今日この頃である。

「秋大生活のひろば」No. 132 (2011年4月刊)

